

夏の果樹園 ● 桑野智章

さつきまで隣に立っていた君の影だけ地面にうつすらのこる
咲くことが使命と聞いて向日葵は丘に立つなり朝日をあびて
こしらえてまたこしらえて涙ぐむ顔のつくりはむかしと同じ
お気に入りの物がいくつかあるはずと君は見回す夏の果樹園
金属のおおきな鳥がとんでゆく生身のとりが集うむこうを
輝くことをゆるされたのか廃駅に今年は咲けり紅きカンナは
いつせいに運動場に放たれて園児は山羊よりすばやくはしる
きょう出会う誰かに教えん夏の陽に溶けそうになる布袋葵を
籠の中に夏の思い出あつたはず土手に横たわる朽ちた自転車
ひとときの安らぎ求め街にでる骨董屋にみる白磁のくもり
にんげんの心の中に住むという小さな人形あるかせてみる
語らざる二人であれど代る代る穴を覗けりマンホールの闇
いつしかに脹らみている積乱雲その足もととははつきりとせず
近景にコーラ、遠景に海があり、やっぱり君は夏というのだ
鋭き棘も老木となり丸くなる棘なし薔薇もあるというのに
滑らかにかたつむり這う八手の葉 帰ってこいと昔をおもう
水の辺に獣の足跡みつけたり小さきサンダル履きしけものか
点描の風景の中を歩きおり われの身体はドットとなりて
もめごとは日常のこと 絡みたる蔓をほどこいて果樹園の昼
同じ顔の繰返しではないことは分かっていたさ君は季節で